

(矢臼別平和委員会「会員だより 316 号」2020 年 7 月発行掲載)

三宅先生の資料

倉谷あみ

2020 年 3 月 21 日午後 7 時 8 分、元北海道教育大学釧路分校教授、三宅信一先生（享年 94）が逝去された。道東における教育社会学の実践的研究者・指導者として、平和・民主を学び、生きる指標を探す若い世代の人を最後まで励まされていた。

新型コロナウイルス感染緊急事態の中、ご家族に見守られ先生は旅立たれた。

葬儀はご家族葬であったけれど、三宅先生がさし示した道標（みちしるべ）によって平和活動の道を進めた矢臼別を含む道東、道内外全国の人が各々の地で、感謝と哀惜の想いを深めて見送った。

8 年前の 2013 年夏、教育大学釧路分校階段教室で卒業生有志（50 年前の学生）主催による三宅先生の 30 分講演を、卒業生の家族として聞く機会を得た。特に強い印象を受けたのは、三宅先生が米軍海兵隊が移転訓練のため釧路港に上がり、釧路泊で街に出てきた彼らに声をかけ、カフェやビヤホールに誘ってビールやコーヒーをすすめ、いろいろ話しをした、というエピソードである。

皆、20 歳前後か 20 代の青年。三宅先生は「Marine Go home」と言ったわけではないけれど、彼らの故郷のこと、家族の話をいろいろ聞いたので、中にはホームシックになる隊員も出てきて、上官から「中年の日本人男性（三宅教授）に声をかけられても、ついて行かないように」という指令が出されたという。

先生の独特の「平和運動」だった。

三宅先生も第二次世界末期 19 歳の時は軍国青年で、海軍に志願した。

うみゆ みずつくかばね やまゆ くさむすかばね
海行かば水漬く屍 山行かば草生す屍

〈海で戦えば水屑となるまで 山で戦えば草蒸す屍になるまで（戦います）〉

大君の辺へにこそ死しなめ かへりみはせじ

〈天皇の傍で死ねるなら 後悔はしない〉

19 歳の三宅信一青年は「草の上に自分の屍をさらすのは嫌なので、水漬く屍を志願した」そして、「教育勅語は今でも暗唱できますよ」といわれた。

「教育」の名の下で戦争国家を維持する精神・思考の金縛り教育から自由であるこ

とは極めて困難だ。不安や恐怖から逃れるために「従順」になってゆく。時には「死」に対しても「従順」になってゆく。

米海兵隊の若者は道東矢臼別に災害救助の訓練に来たのでは無い。破壊の訓練、殺人の訓練に連れて来られた。なにゆえに志願して戦場に行くのか。三宅青年が志願したように、「草の上（都会）に屍をさらすよりも」ではないのでしょうか？

彼らの生きる選択の幅は大変狭く、切迫した社会条件に追い詰められているのではないのでしょうか。自分が死ぬか、誰かを殺すか。自分が生き誰かも生きる、という夢にたどり着けず。

昨年6月オープンした「矢臼別平和資料館」。三宅先生資料の中には、1953（昭和28年）年6月29日付、北海道新聞夕刊4面の切り抜き記事がある。大きなタイトルは「基地・西春別の表情」「第二の千歳を憂う一軒並みの紅燈、流れるジャズ」「ジェット機は常に頭上に」「親切な米兵一通学自動を学校は送る」「市街の膨張に生徒急増一廊下でも授業―ジェット機は校舎すれすれに…」。(坂井記者)の序文には、「駐留軍基地の問題がいま全国的に大きく取り沙汰され、各地に接收反対の狼火が上げられている時―昨年十月、半強制的に米空軍不時着用滑走路として接收された別海村（現在別海町）西春別その後の表情はどうか…現地を訪れてみた。基地でない不時着用だといわれながら、そこには完全に基地化された『西春』の変貌した姿が、悲喜交々の様相を織りなしている」、とある。

1952年（昭和27年）4月、川瀬氾二さん杉野芳夫さんを含めた6人が戦後開拓者として矢臼別（当時三股＝ミマッカ）に入植してきている（鉄道の西春別駅で下車して）。米軍駐留軍は1959年に撤退しているけれど、1961年に第6回別海村村議会で自衛隊誘致が決まり（反対議員4名～反対の署名活動をして請願した村民もいたことが村議会議事録にある）、1962年（昭和37年）矢臼別は自衛隊演習場になった。

私が矢臼別の住人となり3度の冬を越す中、全国600人に及ぶ有志のご支援で資料館は生まれ、成長に向けて歩みだした。私自身の資料の読み込み、学びはまだ小さな一歩に過ぎないが、その中で大きな世界的問題と身近な町政とが視野に入ってきた時、まだこれから…と静かな啓示を受けた。

後世を信じ膨大な資料を託され、「君たち、よろしくたのむよ」と微笑みながら旅立たれた青年の三宅信一さん。心から、ありがとうございます。

2020年6月27日